

Star Trek が描くアメリカ — 「信憑性」がもたらすもの —

America in *Star Trek* : What Comes with “Believability”

川口 雅也*

1

伝統的な衣装を纏ったアメリカ先住民族が、テレビの中で、自らの歴史、価値観を語る。記録映画ではない。テレビ・ドラマの中でのことだ。筆者が米国滞在中のホテルで、偶然、スイッチを入れたテレビで放送されていたのが、このドラマであった。アメリカ合州国で放送されるテレビ・ドラマが、自国の負の歴史を包み隠さず描く。筆者は驚きを禁じえなかった。日本のテレビ・ドラマが、日本の先住民族に対して日本政府が行なってきた差別的な行為に言及することがあるだろうか。しばらくして、見慣れたPicard（ピカード）艦長の姿が目に入り、それが*Star Trek: The Next Generation*（『スター・トレック一次の世代—』、1987-94、以下TNGと略称で呼ぶ）の、日本では当時未放映だったエピソードであると気づいたとき、*Star Trek*（1966-、6つのテレビ・シリーズと11本の映画の総称。以下、STと呼ぶ）の“infinite diversity in infinite combinations”（「無限の組み合わせが生む無限の多様性」）を描く姿勢は（*The Last Conversation* 124）、ここまで本気なのだと感嘆した。

そうした本気は、原作者Gene Roddenberry（ジーン・ロデンベリ、1921-91）が最初のSTの製作時から繰り返し強調してきた作品世界の「信憑性」を重視する製作姿勢に顕著であり、TNGにおいても、作品世界に一貫性をもたせるためにロデンベリによって書かれた*Writers'/Directors' Guide*（『脚本家・監督向けの手引書』）の中で、“Believability is Everything. It is the Essential Element”（「信憑性がすべて。それは欠くことのできない要素だ」）と作り手たちに指示が出されている程である（*Guide* 9）。本論では、前述のエピソード“Journey's End”（「旅路の果て」、1994）をとりあげ、その作品世界の「信憑性」はいかにして高められていったのか、そしてまた、その「信憑性」は何を視聴者にもたらすことになったのか考察していく。

2

「旅路の果て」には、ホピ族を思わせる伝統的価値観を重んじるアメリカ先住民族が登場する。彼らは、地球での度重なる強制移住の歴史の末、22世紀には地球を離れ、24世紀

* 浜松学院大学（アメリカ文学、英語圏大衆文化）

になってようやく、惑星Dorvan V（ドーヴァン5号星）に安住の地を見つける。しかし、Cardassians（カーダシア人）というThe United Federation of Planets（惑星連邦）には属さない種族と、惑星連邦の政府との間で交わされた和平条約の取り決めにより、ドーヴァン5号星はカーダシアの領地となり、連邦に属する先住民族たちは、その惑星からの立ち退きを要求されることになる。連邦のNechayev（ナチュェフ）提督から、彼らの移住計画の指揮を執るよう命じられた宇宙艦*Enterprise*（エンタプライズ号）のピカード艦長は、“Admiral, centuries ago,”（「提督、数世紀前には、」）と話を切り出し、“these North American Indians were forcibly displaced from their ancestral lands”（「あの北米インディアンたちは先祖の土地から強制移住させられていたのです」と過去に言及し、その迫害の歴史を苦渋の表情で語り始める。¹ アメリカ先住民族が地球を離れ、ドーヴァン5号星へ移住したことについても、それが、“more than 200 years ago in order to preserve their cultural identity”（「200年以上も前に、自分たちの文化的アイデンティティを保つために」）行なったことだと言い、それは、ピカードたちが暮らす24世紀の世界から200年以上前、つまり、22世紀に到るまで、地球では彼らの文化は迫害を受け続けたということを物語っているのである。人々は意識を変容させなければ、22世紀という、視聴者にとっての未来の世界まで、負の歴史は続いてしまうと暗示しているかのようだ。さらに、このエピソードの実際のアメリカの歴史との繋がりには、“You see, Admiral, there are some very disturbing historical parallels here. Once more, they are being asked to leave their homes because of a . . . a political decision that has been taken by a distant government”（「おわかりですね、提督、何かとても心を乱される歴史の繰り返しがここで起きている気です。またしても、彼らは自分たちの故郷を立ち去るよう求められているのです、そんなことのために . . . 遠く離れた政府によってなされた政治的決定のために」）という発言にも顕著である。普段は冷静沈着なピカードが、このことに関しては、憤りを隠せない様子で、上官である提督に対して、アメリカ合州国政府により先住民族になされた強制移住の歴史の再認識を促すように、ゆっくりと、しかし、強い口調で、連邦による移住計画に異議を唱えているのである。娯楽としてしか考えられないことも多いであろうテレビ・ドラマの中で、「旅路の果て」は、アメリカの負の歴史を、単に過去に留まるものとしてだけではなく、現代、未来へも繋がるものとして、大胆に語っているのだ。

TNGの主要人物の中でも、エンタプライズ号の艦長を務めていることから、主人公と見なされ、視聴者からの共感を最も得やすく、それゆえに、作り手の意思を最も反映する存在であるとみなされるピカードが語るだけでも、実際の歴史への言及は視聴者に届きやすいのだが、先住民族自らの口から語られるとき、そのアメリカの負の歴史は、さらに強烈に視聴者の胸に突き刺さる。ピカードと先住民族の間の二度目の話し合いの席で、先住民族の首長Anthwara（アンスワラ）は、プエブロと呼ばれる先住民族たちがスペイン人による支配を一掃することになった“the Pueblo Revolt of 1680”（「1680年のプエブロの反

乱]) という、歴史的事実言及し、さらに、その10年後に再び征服をするために戻ってきたスペイン人たちがしたことをピカードに語る。² アンズワラは、彼らを “brutal” (「残忍で」) あったと言い、少し間を置いてから、侵略者の価値観のみから先住民族が不当に呼ばれてきた “‘savage’” (「『野蛮人』」) という蔑称を、憤りを込めて侵略者たちに投げ返し、そんな彼らの「残忍」な行為を、“They killed hundreds of our people. Thousands more were maimed” (「連中は同胞を何百人も殺した。さらに何千人もが手足を切り落とされた」) と具体的に語る。ヨーロッパ系アメリカ人にとって、耳をふさぎたくなるような、現在のニュー・メキシコで起きたアメリカの負の歴史を、STというテレビ・ドラマは、ここまで率直に、先住民族に語らせ、全米の視聴者たちに問題を投げかけている。「旅路の果て」は虚構の作品でありながらも、現代にまで至るアメリカの実際の負の歴史をそこに繋げることで、視聴者たちの胸を苦しくさせる程の「信憑性」をもって、24世紀の未来での「何かとても心を乱される歴史の繰り返し」の可能性を示唆しているのである。もちろん、痛ましい歴史と現状を学習するために、視聴者は45年近くもSTを観続け、支持してきたわけではない。視聴者がSTを好む理由は、そこで描かれる理想的な未来の姿にある。「旅路の果て」にしても、その目的は、ピカードが危惧していた「何かとても心を乱される歴史の繰り返し」を、ピカードたちが、どのように回避し、解決に導いていくのかを見せることにある。実際の過去・現在から、その未来へ繋がっているという「信憑性」を伴いつつ。

3

「旅路の果て」における惑星連邦政府とアメリカ先住民族との間に生じた現代社会にも通じる問題を、理想的な形で解決に導いていく基盤になるのが、STというシリーズ全体に一貫して流れる原作者ロデンベリの哲学である。彼は、未来の世界では「無限の組み合わせが生む無限の多様性」が尊重されるのが当然だと信じていた。STのテーマを彼は次のように語っている。

If there was one theme in all of *Star Trek*, it was that the glory of the universe is its infinite combinations of diversity. That all beauty comes from diversity. What a terrible, boring world it would be if everyone agreed with everyone else. When we are truly wise —and my test for a wise human is when they take a positive delight when someone says, “I disagree with you because . . .” —my God, what an opportunity that will open!
(*The Last Conversation* 1-2)

『スター・トレック』のすべてに渡って一つのテーマが存在していたとすれば、それは、宇宙の素晴らしさは無限の組み合わせによる多様性にあるということだった。つまり、すべての美しさは多様性から生まれるということなんだ。もし誰もが他の人たちがす

べてと同じ考えを持ったとしたら、ひどく退屈な世界になってしまうことだろう。私たちの真の賢明さは——賢明な人間かどうか、私なりに試すやり方があるんだが、それは、「あなたには同意できないな、どうしてか」というと・・・」と言われたときに、前向きに喜びを感じるかどうかということなんだ。——ああ、そのことで、なんという可能性が開かれるのかと。

「すべての美しさは多様性から生まれる」とロデンベリは考え、互いの意見が相反するときこそ、「前向きに喜びを感じ」、見解の相違こそが「可能性」をもたらすことになると主張している。この考えに従えば、連邦と先住民族たちとの見解の相違も、頭を悩ます問題ではなく、両者が平和に共存していくという「無限の組み合わせによる多様性」という「美しさ」に繋がっていく「可能性」を含んでいるということになる。

しかし、疑問に思う人も少なくないのかもしれない。ロデンベリはSTに「信憑性」を求めたというのに、そんな楽観的なSTの世界観のどこに「信憑性」があるのかと。

ロデンベリが、その世界観の根拠としているのが、進化する人間という概念である。彼は述べている。

I know that humans, even today, capture and torture people and commit war and all of that. But that's because they are still children and children are violent. But I refuse to think any other way about the human race but that they are beautiful children. They will, in the end, persevere. (“New Frontiers” 9)

私だってわかってる、人間は、今日でも、人々を捕らえ、拷問し、戦争をしたり、そんなことばかりしてる。しかし、それは、彼らがまだ子どもで、子どもというのは暴力的だからなんだ。しかし、私は人類に関して、彼らは美しき子どもだという考え方以外は拒絶する。彼らは、最後には、切り抜けるんだ。

この発言を見ると、彼が決して、現代人の「戦争」に象徴される「暴力的」な行為を見ていないわけではないことがわかる。彼はただ、現代の人間を、未来に向けて成長していく「美しき子ども」として見ているのにすぎない。「無限の組み合わせによる多様性」を「美しさ」として見る彼の哲学は、進化した人間が行き着く先としての未来像なのである。それゆえ、その「信憑性」も、現代における「暴力的」な「子ども」に当てはまるものではなく、「そんな状態を切り抜け」た未来の人間の「信憑性」であると言える。そうであれば、ロデンベリが想像し、創造した24世紀の未来に生きるピカードが、「多様性」を尊重すべく、アメリカ先住民族の移住計画の指揮を命じられた際にナチュフ提督から言われた、その計画は宇宙全体の“for the greater good”（「より大きな幸福のために」）行なうものだという連邦の考えに忠実に従おうとするのと同時に、これもまた「多様性」を尊重すべ

く、アメリカ先住民族の歴史的背景を考慮し、ドーヴァン5号星での彼らの生活を壊してはいけないのではないかと考え、彼らとの話し合いで何とか和解案が見つからないかと「葛藤」する姿勢にも「信憑性」が見出せるのである。

同じ住環境の惑星を見つけたから、安心して移住ができると、話し合いの席で、先住民族を説得しようとするピカードに対して、首長アンスワラは、住環境が良いという物理的な理由だけで、この惑星に居住しているわけではないと言い、“other more . . . intangible concerns”（「他のもっと . . . 形には現れない関わりのあること」）も理由になっているとして、“I was welcomed by the mountains, the rivers, the sky”（「私はあの山々に、あの河川に、あの空に迎え入れられたのだ」）と語り、ドーヴァン5号星に彼らが感じた“a deep spiritual significance”（「霊的な深い意義」）に言及している。こうした、自然観は、アメリカ大陸に限らず、世界各地の先住民族に共通するもので、よく知られていることだと思われるが、歴史だけでなく、こうした先住民族の文化の基盤となる価値観をも作中で語らせることは、物語の「信憑性」をより高めることに繋がっている。そしてまた、そうした先住民族の発想に触れたピカードに、“I have the deepest respect for your beliefs and the meaning that they hold for your people”（「あなた方の信仰、それがあなたがたの民族にとって意味することに、私は非常に深い尊敬の念を抱いています」）と語らせることで、「無限の多様性」を尊重するSTの世界観を示すのにも、大いに役立っている。そうした実際の先住民族の世界観は他の場面においても、彼ら自身の台詞として語られており、“Everything is sacred to us. The buildings, the food, the sky, the dirt beneath your feet and you”（「我々にとって、すべてのものが神聖だ。建物も、食べ物も、空も、君の足についた土も、それに君も」）という森羅万象の見方や、“We have strong ties to our ancestors. We believe their actions guide us . . . even now”（「我々は先祖たちと強い繋がりがあある。彼らの行為が我々を導いてくれると我々は信じている . . . 今でもまだ」）といった信仰もその一つである。

しかし、彼らの思考法を最も劇的に伝えるのは、先に紹介した「プエブロの反乱」を語るアンスワラの言葉の後半部分であり、これはまた、「旅路の果て」の物語の一つのクライマックスを形作ることにもなる。「プエブロの反乱」の10年後に再び、プエブロの先住民族たちを征服したスペイン人兵士の一人の名前がピカードであり、“your ancestor”（「あなたの先祖だ」）と、アンスワラは語り、“That is why you have come to us—to erase a stain of blood worn by your family for 23 generations”（「だからこそ、あなたは我々のもとにやってきたのだ——23世代に渡ってあなたの家族が纏ってきた血の汚れを消すために」）と言って、ピカードが惑星連邦政府の代表として話し合いに遣わされたことの意味付けをする。ここでの発言の冒頭部分で、“To us, nothing that happens is truly random. So, we searched for the true reason why you were sent”（「我々にとって、真に偶然で起こることなど何もない。だから、我々はあなたが遣わされた真の理由を探し求めていたのだ」）と

言うアンスワラの言葉が、彼らのものごとの見方の基盤を示している。これもまた、多くの先住民族に共通して見られる考え方であり、彼らの思考法の中心をなすものと言ってよいだろう。この思考法に基づいて、自身が忌み嫌ってきた歴史と結び付けられたピカードの苦悩は、この作品のクライマックスの一つとなって、視聴者たちを、作品世界により一層引き込むことになる。実際の歴史、実際の先住民族の思考法、それらが作品世界に「信憑性」をもたらし、また、ピカードが「非常に深い尊敬の念を抱いて」彼らの言葉に耳を傾けている様子は、作品世界の「無限の多様性」の尊重という世界観の「信憑性」をも高めることに役立っているのである。³

この「無限の多様性」という世界観を、作り手たちが本気で描こうとしたことは、*ST*の未来像が何を基盤に成り立っているのかを考えると、より明白になる。ピカード艦長が指揮するエンタプライズ号は、宇宙艦であると同時に、未来の世界の“space community”（「宇宙の共同社会」）を象徴する存在でもあるのだが（*Guide* 42）、そこでの快適さは、テクノロジーを基盤に成り立っている。そうしたテクノロジーの称賛は、ロデンベリが、“stories in which technology is considered the villain”（「テクノロジーが悪者と見なされるような物語」）は作ってはいけないと作り手たちに指示を出していることに（*Guide* 13）、顕著に表れている。つまり、*ST*においては、テクノロジーを基盤として築かれた惑星連邦の文化・価値観が否定されるようなことがあってはならないのだ。しかし、だからと言って、これまで見てきたように、テクノロジーを否定して生きてきた先住民族の文化・価値観を非難することがあってはいけない。両者に意見の相違があると言っても、どちらが正しくて、どちらが間違っているかというような、二項対立的な発想で描かれてはいないのである。「無限の組み合わせが生む無限の多様性」という世界観には、様々な文化・価値観に優劣をつけることも、正誤の判断を下すことも入り込む余地はない。類稀な多元的な*ST*的視点がそこにはある。

「旅路の果て」というエピソードは、先住民族に対する実際の米国の負の歴史を物語に導入し、視聴者にとっての過去・現在・未来をつなぎ、作品世界の「信憑性」を高め、また、先住民族と惑星連邦の相反する文化・価値観に正誤の判断を加えることもせず、「無限の多様性」を尊重する姿勢の「信憑性」をも高めている。しかし、作り手たちはさらなる「信憑性」求めて、思い切った決断をすることになる。主要作中人物の間に、ロデンベリが禁じていた「葛藤」を持ち込むことにしたのである。そのことで、「旅路の果て」という物語はさらなる「信憑性」を帯び、視聴者に対する物語の説得力が増大することになる。しかし、ロデンベリの世界観こそが*ST*のはずである。作り手たちは、ロデンベリの世界観を無視しようというのだろうか。

4

ここで、ロデンベリが主要作中人物たちをどのように設定していたかを見ておきたい。

TNGにおける主要人物とは、すなわち、エンタプライズ号の乗員たちであるが、“Important:”（「重要」）と注意を促した上で、“Regular characters all share a feeling of being part of a band of brothers and sisters”（「毎回決まって出演する作中人物たちは、皆、兄弟、姉妹としての連帯感を共有している」）と作り手たちに強調している（*Guide* 6）。

しかし、ロデンベリは1991年には他界しており、「旅路の果て」が製作・放送された1994年にSTを指揮していたのはRick Berman（リック・バーマン、1945-）であった。Michael Piller（マイケル・ピラー、1948-2005）、Jeri Taylor（ジェリ・テイラー、1938-）も、バーマンと同じ立場のexecutive producers（製作総指揮）を務めていたが、TNGの始まりからロデンベリの信頼も厚く、第2シーズン辺りから、老齢のロデンベリに代わり、後継者としてSTの実質的な責任を負っていたのはバーマンであった（*Captains' Logs* 170）。しかし、彼がSTの指揮を執るようになった後も、ロデンベリの世界観は守られ続け、STはSTであり続けてきた。その理由はバーマンの発言に明らかである。彼は、“Star Trek is not my vision of the future, it's Gene's”（『スター・トレック』は私の未来像ではなく、ジーンのものだ）と断言し、“it is my responsibility to keep it that way”（「私の責任は、それをそのままに保つことだ」）と認識している。バーマンがロデンベリの後継者としての役割に徹し続けたからこそ、STはSTのままで存在し続けることができたのである。それゆえ、“Gene was very much against setting a Star Trek show in a place where there was conflict among the [core] characters”（「ジーンは『スター・トレック』のどのエピソードも、核となる作中人物の間に葛藤が起こるような設定にすることに断固として反対していた」）ことも十分承知していた。しかし、その一方で、“Michael and I felt it [conflict] was a necessary element of good drama”（「葛藤は良いドラマに欠かせない要素だとマイケルも私も感じていた」）と言うバーマンは、ロデンベリの世界観を守りつつ、STに葛藤を持ち込む術をピラーとともに工夫する。“We do bend his rules a little. . . . But we try not to bend them too far. And we never break them”（「彼の決まりごとを少しだけ曲げることにしよう。 . . . ただし、あまり曲げすぎないようにして。壊すのは絶対だめだ」）と、方針を決める。“by not having conflict among the Starfleet characters”（「宇宙艦隊の人物の間には葛藤を生じさせないようにして」）と語っているように、レギュラーの作中人物であっても、少なくとも、どちらか一方が、惑星連邦の宇宙艦隊に属していなければ、「葛藤」が生じてかまわないと、ロデンベリの「決まりごと」を拡大解釈することにバーマンは決めたのだった（“Keeping the Flame” 20）。

こうして、「兄弟、姉妹としての連帯感を共有している」という理想的な人間関係の「宇宙の共同社会」で生活する人物たちの間にも、「葛藤」が導入されることになる。ロデンベリの発言にあったように、意見の相違に出くわしたときに、すぐさま、そのことに「前向きに喜びを感じる」というような、彼が想像した未来の理想的な人間の姿とは多少異なるのだが（これが、すなわち「決まりごとを少しだけ曲げる」ということの結果なの

だろう)、「喜び」に到る前に、まずは「葛藤」を生じさせ、それが解決される方向に向かう過程を描くことで、よりいっそうの「信憑性」をもって、ロデンベリが唱えた「無限の多様性」を尊重する理想の世界に視聴者を招き入れることになるのである。そのようなして、「旅路の果て」においては、Starfleet Academy (宇宙艦隊学校) を辞める決意をする士官候補生のWesley Crusher (ウェスリ・クラッシャー) と、彼にとって上官であるとともに、父親のような存在でもあるピカードの間に「葛藤」が生まれることになる。

5

アメリカ先住民族たちとの話し合いも物別れに終わり、彼らを強制移住させるようにと命じられたピカードは、ナチェフ提督が察したように“moral objections” (「倫理的異議」) を感じつつ、不本意ながらも、その命令に従うことになる。こうして、強制移住を断固拒否する先住民族と、それを強行しようとする惑星連邦との「葛藤」が強まっていく。

この話と並行して描かれるのが、ウェスリが自立していく過程である。彼はエンタプライズ号の医師であるBeverly Crusher (ビヴァリ・クラッシャー) の息子である。15歳の頃からエンタプライズ号に乗艦していたが、テクノロジーに関して天才的な才能があることから、将来は宇宙艦隊を担う存在になると周囲から大きな期待をされ、19歳になると宇宙艦隊学校に入学する。そのウェスリが学校の休暇をとり、久しぶりにエンタプライズ号に戻ってくる。しかし、彼は、周囲の期待という重圧感に耐えられなくなり、自分を見失ってしまっていた。そんな彼に、“vision quest” (「未来像の探求」) と呼ばれる、先住民族の自分探しの儀式をさせ、自身の進むべき道を見つけるように手助けしたのが、先住民族のLakanta (ラカンタ) であった。その中で、ウェスリは、自分自身を見つけ、周囲の期待に添う生き方ではなく、自身の思う生き方を決意するに到り、また同時に、自分を導いてくれた先住民族の文化の在り方に感銘を受け、彼らを強制移住させようとする惑星連邦の在り方に疑問をもつようになり、最終的には宇宙艦隊を離れる決心をするのである。

このようにして、ピカードとウェスリ、二人の「核となる作中人物の間に葛藤が」持ち込まれる。先に述べた「決まりごと」の拡大解釈により、ウェスリとピカードとの間の「葛藤」が可能になったのだ。しかし、そうはいつでも、これは作り手たちにとって、簡単なことではなかった。テイラーがその事情を説明している。

There was a lot of concern that this character [Wesley], whom Gene created with his middle name, who *was* Gene Roddenberry—that it was doing him a disservice to have Wesley leave Starfleet, . . . (*Companion* 290)

ウェスリは、ジーンが自分の中間名をとって創造した人物で、ジーン・ロデンベリその人だったから——ウェスリを宇宙艦隊から離れさせてしまうなんて、ジーンにひどい仕打ちをしてるんじゃないかって、とても心配だったわ、・・・

宇宙艦隊からウェスリを脱退させること、それはすなわち、ロデンベリを宇宙艦隊から脱退させるようなものだったのだ。STの理想的な人物たちで構成されるのが宇宙艦隊であり、それはSTの未来像の核とも言える組織である。それゆえ、ロデンベリの分身であるウェスリを除隊させることは、ロデンベリをSTから引き離す行為ともとれる。⁴ロデンベリのSTであり続けることを第一義としていた作り手たちにとって、それが苦渋の選択であったことは想像に難くない。しかしそうであっても、「葛藤」の導入は、ロデンベリが重要視した「信憑性」を高めるためには欠かせないこと、つまり、STをよりSTらしくするのは欠かせないことだったのである。ロデンベリの世界観を守りつつ、ロデンベリが重視した作品世界の「信憑性」を高めなければならないという、そんな「葛藤」が作り手たちの心の内にあった。作品世界の外側でも「葛藤」が存在していたというのは興味深い。

秘密裏に強制移住を進めようとしていたことを、アメリカ先住民族に暴露してしまったウェスリに対して、ピカードは怒りを露に彼を非難する。ナチュフ提督から移住計画を聞かされたときの彼の憤りも、普段感情を表に出さないピカードにしては、珍しいことであったが、このときのピカードは、感情を抑えようとすることもなく、激怒している。もちろん、上官ではなく、部下が相手であることも、その一因であろうが、普段のピカードなら、部下に対しても、威圧的な態度をとることはほとんどない。この憤怒はどこからくるのか。惑星連邦への忠誠心ゆえのものなのか。私情と公務を絶えず区別して艦長としての任務にあたってきた彼にとって、個人的な感情のみで行動するウェスリの姿勢が許せなかったのか。あるいは、ピカードなりの距離感を保ちながらも、息子のように思い、愛情を注いできたウェスリが自分に背いた行為をしたのが我慢ならなかったのか。そうしたことも、ウェスリがピカードの逆鱗に触れた理由になっていることはもちろんだろう。しかし、こうも考えられないか。ナチュフ提督からアメリカ先住民族の移住計画の指令を受けたときも、その後、先住民族たちとの話し合いに臨んだときも、連邦の一員として行動しようとしながらも、ピカードの心情としては、やはり、移住計画が妥当なものだと受け入れることができずにいた。任務に忠実であろうとする彼の行動は、彼の信念から生じたものでは決してなかった。彼の曇った表情と、先住民族に対して強気な言動をとれない彼の態度に、そのことは、はっきりと表れていた。そうであるならば、心のままに、先住民族を擁護しようとするウェスリの行動は、ピカードがとりたかった行動でもあるはずだ。この任務に関しての全権を担っているのに、心と行動を一致させられないピカードの、自分自身に対する苛立ちが、激しい怒りとなって、先ほど述べたような他の理由も重なって、感情をぶつけることが許される対象であるウェスリに向けられたのではないか。これほどまでに感情的なピカードを見せられた視聴者の戸惑いは、ピカード自身の戸惑いでもある。このとき視聴者はピカードの心情を体感しているのだ。

そんなピカードに対するウェスリの反応も、視聴者を驚かせるものとなり、両者の感情のぶつかり合いは、ピカードの先祖が先住民族虐殺に関わっていたと告げられる場面と並

んで、このエピソードのもう一つのクライマックスとなる。幼くして父を失ったウェスリにとって、父親代わりのような存在でもあったピカード艦長なのだが、しかし、その彼に対して、ウェスリはピカードとは対照的に静かに、しかし、きっぱりと反論するのだ。“What you’re doing down there is wrong. . . . They’re a unique culture with a history that predates the Federation and Starfleet. . . . I’m resigning from the Academy”（「あなたがたがそこでしていることは間違っています。 . . . 先住民族の存在は連邦、宇宙艦隊に先立つ歴史をもつ類稀な文化なのです。 . . . 僕は学校を辞めます」）と。アメリカ先住民族と対立する宇宙艦隊からの脱退は、先住民族の文化の歴史の深さと、その特性に敬意を払うウェスリの心情の強さを強調するものであり、ウェスリのこの言動に接して、驚きを隠しきれず、呆然と立ち尽くすピカードの姿は、視聴者に強烈な印象を残す。それまでの、どのエピソードでも、ピカードのことを他のどの作中人物よりも信頼し、その言動に共感してきた視聴者であるが、「旅路の果て」においては、ピカードのウェスリとの「葛藤」を通じて、ピカード自身と同様に、感情が揺さぶられ、困惑し、啞然とし、ピカードがしていること、惑星連邦がしていることに対して、その正当性を今一度問い直すよう促されるのである。⁵

6

「旅路の果て」は次のような形で幕を閉じる。惑星連邦との条約により、ドーヴァン5号星に居住することになったカーダシア人たちは、ピカードとアメリカ先住民族との話し合いがまだ終わらないうちに、事前調査と称してドーヴァン5号星にやってくる。それに納得できない先住民族たちとカーダシア人たちとの間で、それを止めようとする宇宙艦隊をも巻き込んで、銃撃戦が始まる。しかし、ピカードの懸命の説得もあり、以前の戦争で子どもを亡くしたカーダシア人のリーダーであるEvek（イヴェック）も、戦争がもたらす悲惨さを思い出し、カーダシア人兵士たちに撤退を命じ、全面戦争は、ぎりぎりのところで回避される。その後、ピカードは、イヴェックとアンスワラの間に入り、両者の話し合いを進めた結果、先住民族たちは、惑星連邦の保護がなくなることを承知の上で連邦を脱退し、そのまま故郷に留まり、入植してくるカーダシア人たちと、互いに干渉しないということを条件に、ドーヴァン5号星で暮らしていく決意をする。話し合いの後、アンスワラはピカードに告げる、“I was right, Captain. You did not take us from our land and you have wiped clean a very old stain of blood”（「私は正しかった、艦長。あなたは我々の土地から我々を追い出しはしなかった、あなたはきれいに拭いたんだ、ずっと昔からの血の汚れを」）と。アメリカ先住民族の発想を視聴者は再認識させられる形で、移住計画に関わる問題は解決されることになるのだ。

一方、ウェスリを先住民族の文化に導いてきたラカンタは、先住民族に姿を変えたThe Traveler（旅人）と呼ばれる時空を超えて存在する種族だったことが、先の銃撃戦の最中

に明らかにされている。⁶ 戦闘を望まなかったウェスリの “No!” (「やめろ!」) の一声で、時間が静止し、銃撃戦は止まったままの状態になるが、啞然とするウェスリに、旅人は次のように説明をしていた。

You pulled yourself out of their time. You took the first step, Wesley. . . . To another plane of existence . . . another way of thinking. . . . You found a new beginning for yourself—the first step on a journey that few humans will ever take. . . . You’ve evolved to a new level. You’re ready to explore places where thought and energy combine in ways you can’t even imagine.

君は彼らの時間から君自身を引き出したんだ。君は最初の一步を踏み出したんだよ、ウェスリ。 . . . 存在のもう一つの段階に . . . 思考のもう一つの在り方に . . . 君は君自身にとっての新しい始まりを見出したんだ——ほんのわずかな人間しか踏み出すことのできない旅の最初の一步を。 . . . 君は新しい水準に進化したんだ。想像さえできないような形で思考とエネルギーが融合する所を探査する準備が君には整ったんだ。

違う次元を移動し続ける旅人の言葉を解釈するなら、「彼らの時間から君自身を引き出したんだ」、「存在のもう一つの段階に」、「思考のもう一つの在り方に」、「新しい水準に進化したんだ」という表現が示しているのは、ウェスリが、惑星連邦と先住民族の「葛藤」を俯瞰できる次元に移動したということであろう。それは、旅人自身が存在する次元でもあり、様々な種族の文化・価値観を決定づける「無限の組み合わせが生む無限の多様性」を俯瞰できる、まさにSTが理想とする、時空を越えた、普遍という次元である。

さらに、この結末が意義深いのは、旅人が誘う、異なる次元への旅も、物語の展開の中で、唐突なものにはなっていない点である。その形而上の世界は、アメリカ先住民族の精神世界と連続するものであり、それゆえに、「信憑性」を感じながら「旅路の果て」を観てきた視聴者にとっても、物語の自然な流れが損なわれることはなく、「旅路の果て」の「信憑性」は最後まで維持される。そんな旅人と共に、ウェスリは、テクノロジーの世界では学べない、形而上の、未知の世界の探求に旅立つことを決める。今後のことを尋ねるピカードに、自身の生き方を決意した彼は満足気な笑顔を浮かべ、“The Traveler said that my studies would begin with these people. He said that they’re aware of many things. I can learn a lot from them” (「旅人は言ったんだ、僕の学習はこの人たちと共に始まるって。彼はこうも言ったよ、彼らは多くのことを認識している。彼らから僕は多くを学べるはずだってね」と答えている。その旅は、先住民族の文化を学ぶことから始まるのだが、多分に形而上学的である先住民族の思考法が、「思考とエネルギーが融合する所を探査する」という旅の究極の目的へと、違和感なく連続していくことから、先住民族の文化を尊重する作り手の意図がここでも見えてくる。

このように、ピカード、ウェスリ、どちらの行動に関しても、アメリカ先住民族の文化に敬意が払われる形で、文字通り、この物語も「旅路の果て」に至るのである。⁷

7

強制移住を拒否するアメリカ先住民族たちと、彼らを強制移住させることも「より大きな幸福のために」と考える惑星連邦との「葛藤」は、先住民族の側についてのウェスリと、惑星連邦のピカードという主要人物の間の「葛藤」ともなり、毎週放送されるテレビ・シリーズのドラマを通じて、放送開始時から少しずつ両者に共感を覚えてきた視聴者にとって、他人事ではない、より実感を伴う、すなわち「信憑性」をもった「葛藤」になっていた。

先に述べたように、主要人物の中でも、エンタプライズ号艦長という最上位に位置する人物であるピカードは、視聴者からの好感度も最も高く、それゆえに、作り手の意思を代弁する存在と考えられる。「多様性」を尊重すべきだから、先住民族の価値観も尊重しなければならないが、それと同時に「多様性」を尊重すべきだからこそ、他の種族も含めた全体の平和、すなわち、「より大きな幸福」をも考えなければいけないという、ピカードの心の内の「葛藤」を描くだけでも、「無限の多様性」を尊重することの大切さ、難しさを、ピカードという好人物への共感から誘発する形で、視聴者に伝えることも、おそらく可能だったことであろう。

しかし、「無限の組み合わせが生む無限の多様性」という世界観を、最も効果的に、強く、視聴者に訴えかけることができたのは、ウェスリとピカード、両者に思い入れをもつ視聴者の心の内に、どちらにも共感できるという形で「葛藤」が持ち込まれたからであろう。視聴者自身が、そんな内的「葛藤」を通じて、「多様性」を尊重することの難しさを実感し、その実感が物語の「信憑性」を高め、その結果、視聴者は物語と直接的に繋がり、「多様性」が尊重される世界の素晴らしさを実体験できたのではないだろうか。

「旅路の果て」には、ヨーロッパからの入植者が、アメリカ先住民族に対して行ってきた侵略、虐殺、強制移住というアメリカ合州国の負の歴史が、そしてまた、先住民族の精神世界の気高さが、しっかりと描かれている。そこには、自国の歴史・先住民族の文化を見直し、過去・現在の過ちを認めた上で、「無限の多様性」を尊重する未来を描こうとする作り手たちの本気が見える。そして、そんな作り手たちの本気は、「信憑性」をさらに高めてSTの作品世界・ロデンベリの未来像を視聴者に届けたいという想いとなり、作品世界への「葛藤」の導入が、それを可能にした。

「旅路の果て」というエピソードは、STという隠喩の形をとっているが、実際の問題から目をそらさず、実際の間人・社会の姿を、高い「信憑性」をもって描いているという点において、極めて文学的な作品と言える。STの最初のシリーズの『手引書』に記されているロデンベリの言葉を引用し、本論を終えたい。

Keep in mind that science fiction is not a separate field of literature with rules of its own, but, indeed, needs the same ingredients as any story . . . (*The Making of "Star Trek"* 280)

心にとどめておきなさい、科学的虚構は、文学から切り離された分野などではなく、独自の決まりごとをもつこともなく、それどころか、どんな物語にも共通する構成要素を必要とするのだと . . .

注

- 1 もともとは入植者の誤解から生じた呼び名であるが、負の歴史を忘れないようにと、誇りを込めて自らを「インディアン」と呼ぶアメリカ先住民族も少なくない。TNGの作り手たちも、それに倣ったのではないか。あるいは、ドーヴァン5号星にもともと住んでいた種族を指していると混乱されるのを避けるために、エピソードの中では先住民族という言葉を用いるのを避けたのかもしれない。
- 2 より正確には、「プエブロの乱以降、12年間は、ニューメキシコ全域はスペインからの独立を楽しむことができた」ということである（『ホピ 宇宙からの聖書』330）。
- 3 「旅路の果て」にみられる「信憑性」重視の創作姿勢は、アメリカ先住民族のコンサルタントが雇われたことにも表れている。それは先住民族の描写に正確さを期するためであるのはもちろんのこと、作品世界における先住民族に対するピカードの姿勢が、そのまま作り手の姿勢であることを伝えるものでもある。テイラーは、“We intended to treat the Native American culture with the utmost respect and show the value of some of their metaphysical ways of approaching life, that it is positive and valuable but even in the depiction of that, we ran into trouble with some groups who don't want that depicted at all”（「私たちは最大の敬意を払って、アメリカ先住民族の文化を扱い、人生に対する彼らの形而上学的取り組み方のいくつかについての価値を、前向きで有益なものとして示そうとしたのだけれど、そんな描写をしても、そんなふうには絶対に描かれたくないと考えるグループもいて、大変だったわ」と語っている。また producer（制作）を務め、「旅路の果て」においては脚本も書いたRonald D. Moore（ロナルド・D・ムア、1964-）も、最初は先住民族をホピ族として描こうとしたが、問題になると考え、どの民族かは特定できないようにしたと言い、その根拠を次のように説明している。“Maybe the Hopis don't want to be represented on television, they get very sensitive about that. So we [wondered], should we go with another tribe or should we just try to make it a mythical tribe or should we just not say who they are? This is a sensitive issue for a lot of people and these people have the right to be sensitive considering their history. They're understandably careful about what they like said about them and who says what”（「おそらくホピの人たちはテレビで描写されたくはないだろうし、そのことに関してとても繊細になってるんだ。それで他の部族でいくべきか、神話上の部族にしてしまうべきか、あるいは、はっきりさせないでおくべきかって迷ったんだ。多くの人々にとって繊細な問題だし、彼らの歴史を考えれば、そうした人々が繊細になるのも、もっともなことなんだ。自分たちについてどんなことを言ってほしくて、誰がどんなことを言うのかということについて慎重になるのも十分理解できることなんだ」と（*Captains' Logs* 302）。ロデンベリの「無限の多様性」を尊重する世界観が、それを引き継いだ作り手たちの創作姿勢に反映され、その作品世界において、先住民族の存在を尊重しようとするピカードの思いへと繋がっている。

- 4 ロデンベリ自身、“Although I identify with every character, I identify probably more so with Wesley because he is me at 17. He is the things I dreamed of being and doing”（「私は、どの作中人物も自分と同一視しているけれど、おそらく、ウェスリを、より自分と同一視しているよ。彼は17歳の時の私だからね。彼は、私がそうありたい、そうしたいと夢見ていた存在なんだ」）と（“New Frontiers” 4）、1989年、つまりウェスリが17歳という設定のときに語っていた。また、ピカードに関して、*ST*の最初のシリーズのKirk（カーク）とともに、自己の分身だと言い、ピカードはカークと比べて“more mature”（「より成熟した」）時期の自分だとも語っている（“New Frontiers” 9）。青年のウェスリと大人のピカード、ともにロデンベリの分身なのである。
- 5 Collins（コリンズ）は、「より大きな幸福のために」と題された論文において、その大義は惑星連邦にとってのものでしかない指摘し、連邦の姿勢＝作り手の姿勢、であるかのように考え、アメリカ先住民族の存在が尊重されていないとして「旅路の果て」を批判している。
- 6 *TNG*の第1シーズンの“Where No One Has Gone Before”（「誰も到達したことのない所」、1987）で、ウェスリの才能を認め、また第4シーズンの“Remember Me”（「私を忘れないで」、1990）で、ウェスリが母を救出する手助けをしたのが旅人であり、「旅路の果て」は旅人の3度目の登場となるエピソードである。それゆえ、旧友との再会のような雰囲気の中、クライマックスがもたらす緊張感とは対照的な、大団円にふさわしい安堵感を、旅人の再登場は視聴者にもたらす。基本的に一話で完結する映画の世界とは異なり、長期に渡り視聴者を作品世界に留めることになるテレビ・シリーズならではの創作手法である。
- 7 「旅路の果て」が制作された1994年には既に放送2年目を迎えていた*Star Trek: Deep Space Nine*（1993-1999）のエピソード“Maquis”（「マキー」）は、「旅路の果て」の後日談とも言えるもので、*ST*というテレビ・シリーズとしては、アメリカ先住民族の旅が終わったわけではないことを示している。「旅路の果て」の1994年3月28日の放送からさほど間を置かず、4週間後の4月25日に「マキー」の前編が、その翌週に後編が放送されており、そこでは、先住民族に限らず、連邦の旧植民星に留まり、カーダシア人たちと共生することになった人々が、協定を意にも介さないカーダシア人の侵略者の行為に苦しめられ、それに抵抗すべく武装集団マキーを組織し、戦う様子が描かれている。また、翌年からは、*Star Trek: Voyager*（1995-2001）において、Chakotay（チャコーテイ）という元マキーのアメリカ先住民族が、艦長に次ぐ階級であるfirst officer（副長）として登場し、彼を通じて、度々、先住民族の文化に言及されることになる。

本論は、2010年10月9日に立正大学大崎キャンパスで開催された日本アメリカ文学会の第49回全国大会に於ける口頭発表「*Star Trek* 中のアメリカ——『無限の多様性』と『信憑性』——」に加筆修正を施したものである。なお、本論における日本語訳はすべて筆者による。（2010. 12. 14）

参考資料

1 DVD

- Star Trek: The Original Series*. Digital Remaster. Paramount Pictures, 2008.
Star Trek: The Next Generation. Paramount Pictures, 2002.
Star Trek: Deep Space Nine. Paramount Pictures, 2003.
Star Trek: Voyager. Paramount Pictures, 2004.

2 文献

- Collins, Steven F.. “‘For the Greater Good’: Trilateralism and Hegemony in *Star Trek: The Next Generation*.” *Enterprise Zones: Critical Positions on “Star Trek,”* ed. Taylor Harrison, et al., 137-56. Boulder: Westview, 1996.
- Fern, Yvonne. *Gene Roddenberry: The Last Conversation*. New York: Pocket Books, 1994.
- Gross, Edward and Mark A. Altman. *Captains’ Logs: The Unauthorized Complete Trek Voyages*. Boston: Little Brown and Company, 1995.
- Logan, Michael. “Keeping the Flame.” “*Star Trek*” 30 Years. Ontario: Paramount Pictures, 1996.
- Madsen, Dan. “Gene Roddenberry: New Frontiers for the Next Generation.” “*Star Trek*” : *The Official Fan Club Magazine* Oct./ Nov. 1989: 3+.
- Nemecek, Larry. “*Star Trek: The Next Generation*” *Companion*. New York: Pocket Books, 2003.
- Roddenberry, Gene. “*Star Trek: The Next Generation*” *Writers’/Directors’ Guide*. Special Edition 1992-93. ぶんか社、2003.
- Whitfield, Stephen E. and Gene Roddenberry. *The Making of “Star Trek.”* New York: A Del Ray, 1968.
- ウォーターズ、フランク著。林陽訳。『ホピ 宇宙からの聖書——神・人・宗教の原点——』徳間書店、1993。